

書評

石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動 —ガーンディー主義と〈つながりの政治〉—』

京都：昭和堂、2011年、258頁、4,000円＋税、ISBN978-4812210758

石井一也

本書は、スンダルラール・バフグナーというガーンディー主義者の思想と実践に焦点を当てながら、現代インドにおける環境運動の相貌を明らかにしようとした独創的研究の成果である。本書評では、同書の概要を振り返った上で若干の論評を行なうこととしたい。

本書は、序章と終章を含む全8章で構成されている。序章では、ガドギルとグハガ、ガーンディー主義者による環境保護運動を「道徳的・宗教的見地から近代的ライフスタイルを否定するもの」で、「過去」の村落への回帰であると否定的にみたことが示される。著者は、こうした見解を乗り越え、道徳的・宗教的主張はコンテキストによっては有効たりえるものであり、同運動を「新しい社会運動」と親和的なものとして再評価しようとする。とりわけ、バフグナーが積極的に関与したチプコー運動とテラー・ダム反対運動において、住民や活動家など人びとの「つながり」が、地域の枠を超えて世界へ向けて築かれていった事実を「たたかいの政治」とは異なる「つながりの政治」という概念を用いて評価する。環境社会学のよそ者論などの議論を参照し、ガーンディー主義者が、多様な主体を運動に組み入れる媒介者の役割を果たしつつ、高度大衆消費社会へのオルターナティブを提示していたことを強調している。

第1章ではまず、「ガーンディー主義者」が、「インド各地のガーンディー主義アーシュラムで簡素・禁欲の共同生活を送りつつ、ガーンディーがめざした理想を実現するために社会的な諸活動を行っている思想家・活動家」と定義される。著者によれば、1950～70年代前半のサルヴォーダヤの理念は、ガーンディー主義者第一世代のヴィノーバ・バーヴェやジャヤープラカーシュ・ナーラーヤン（JP）の運動を支えたが、この段階ではまだ環境思想ではない。ガーンディー主義に環境思想的側面が付与されるのは、70年代後半のことであり、その担い手がバフ

グナーらガンディー主義者二世代であるという。二世代には、さらにエビ養殖反対運動を指導したS・ジャガンナタン、反原発・有機農業運動を指導したナーラーヤン・デーサーイー、ナルマダー・ダム反対運動に携わったバーバー・アムテールが含まれる。インドのガンディー主義者は、アーシュラム間の連携や年次大会を通じてネットワークを構築してきたものの、二世代から三世代に移行するにしたがってアイデンティティが希薄になる事実も指摘されている。

第2章では、著者による調査の対象地が、ウッタラーカンド州テリーー県テリーー周辺であること、そこでは無償強制労働制度撤廃運動、インド独立運動、森林保護運動、禁酒運動、採鉱反対運動、ダム反対運動、ウッタラーカンド運動、チプコー運動、テリーー・ダム反対運動など、様々な社会運動が盛んに展開されてきたことが語られる。また、ミーラー・ベーンとサララー・ベーンという2人のイギリス人女性によるガンディー主義的活動が振り返られ、彼女らがバフグナーに大きな影響を与えた事実が示される。

第3章では、第一にバフグナーの来歴が紹介される。彼は、1940年にシュリー・デーヴ・スーマンというガンディー主義者に会おうと、やがて政治活動を止めて村落での活動に専念するようになった。60年にバーヴェに共鳴し、「不可触民」制度撤廃運動や寺院開放運動、教育活動、禁酒運動などに従事するようになるが、この段階ではまだ環境問題を課題とするにはいたっていない。もっとも69年になると、森林問題に関する論文で「地元企業による森林産業を振興させるべき」との主張が示され、それは80年代初めには森林伐採全面禁止の主張へと発展してゆく。

バフグナーの考えは、著者によるとつぎのとおりである。すなわち、人間は、欲望を満たすために自然（プラクリティ）を屠殺し、公害や戦争、飢餓など墮落した状態（ヴィクリティ）を作った。それゆえ、「自然の昇華」（自他の変容を含むあらゆるものの潜在的可能性を開花させること）の哲学にしたがって、墮落した状態から文化的状態（サンスクリティ）へと移行する社会レベルでの「昇華」（スサンスカーラ）が必要である。世界を構成する四つの柱は、権力、富、武力、高度な知識であるが、これらを奉仕、節制、平和、善き行いへと変えてゆかなければならない。その担い手となるのが、「創造的な少数者」としての科学者、社会活動

家、文筆家・芸術家・ジャーナリストなどである。こうした彼の考えは、一方ではトインビーやラッセルなど西洋の思想家にも共通する点で普遍的なものであるが、他方では、解脱への手段としての知識、行為、親愛などを社会変革に応用した点でヒンドゥー教的世界観にも依拠しているという。

第4章では、チプコー運動（森林保護運動）におけるバフグナーの思想と実践が説明される。1973年にガルワール地方チャモリー県マンダル村では、女性たちが木に抱きついて他地方の業者による森林伐採を阻止した。バフグナーは、翌74年に「アスコート・アーラーコート行脚」（約700km）を実行し、79年には「死にいたる断食」を行なった。とりわけ後者には、3000人以上の人びとが、11日間の非暴力的抵抗によって呼応し、運動は大いに盛り上がった。この間、アドヴァーニー村では「森の恵みとは何だろう？ それは、大地、水、新鮮な空気だ！」というスローガンが生まれて、運動の目標が、他地方の業者からの森林保護よりも、森林そのものの保護へと傾くようになった。その結果として、81年に「ウッタル・プラデーシュ州における高度1000m以上に生えている樹木の商業目的の伐採全面禁止」をインディラー・ガーンディー首相に受諾させるにいたる。

チプコー運動は、その後ヒマラヤ行脚（カシミール・コヒマ行脚、4870km）やカルナータカ地方のアッピコ運動などへと影響を与えてゆくが、その成果として、活動家と地域住民、活動家とインド中央政界、地元の活動家と海外の活動家、あるいは活動家同士の「つながり」を縦横に築いたことが評価されている。

第5章では、テーリー・ダム反対運動におけるバフグナーの思想と実践が説明される。著者によると、テーリー・ダムは、2006年に完成するとともに、周辺地域40ヶ村が水没し、それまでに7万5000人が立ち退きを余儀なくされた。この間の反対運動による工事中断は、5回を数え、のべ3年以上にわたった。テーリー・ダム反対闘争委員会は、1978年に結成され、デモ集会、座り込み、断食、行脚、逮捕、国会への請願書、法廷闘争など様々な方法をとった。運動は、80年代にはいって下流域住民や専門家・知識人などを取り込み、またナルマダー・ダム反対運動と連携するなど、大きな盛り上がりを見せた。さらに90年代には、5000人を超える人々によるデモ集会や座り込み、バフグナーの逮捕や刑務所内

での断食などに象徴されるように、運動は最高潮に達した。新聞各紙がこれらを取り上げ、バフグナーは、首相との直接交渉と2年半におよぶ工事中断を勝ちとった。

テーリー・ダム反対運動は、その後一時停滞するが、1992年以降それまでより大きな運動形態としてのヒマラヤを救え運動の中に組み込まれ、同時にバフグナーの度重なる断食によってしばしば盛り返しをみせた。ところが、政府機能がニュー・テーリーに移転して闘争の相手が目の前から消え、VHP（世界ヒンドゥー協会）総裁の断食によって運動が「過激な勢力と手を組んだ」といった評価を受けるなかで、2003年9月にダム建設は合憲との最高裁判決が下る。

著者によると、テーリー・ダム反対運動は、地元住民、都市の活動家、ジャーナリスト、科学者、技術者など多様な顔をもつ複合的、重層的運動であったという。そこでのバフグナーの役割は、ガンディー主義者のネットワークを動員したこと、たびたびの断食で運動を盛り上げたこと、ヒマラヤを救え運動に思想的・実践的に影響を与えたこと、そして多様な人々を運動に取り込んだことにある。しかし、2005年時点での著者による聞き取り調査においては、バフグナーの「断食」は「外国から金を得るためだ」という声が聞かれ、また、彼の簡素・禁欲の考えは、人々にとって敬遠したい倫理として受け止められていたことが示されている。

第6章では、「つながりの政治」という概念を軸として、バフグナーの行脚と断食が総括される。著者によれば、まず行脚は、演説や歌、スライド上映などによって人々との「つながり」を築きつつ、政府に報告書を提出するための環境状況の調査を行なうかたちをとる。その背景には、彼の「昇華」の思想があるという。バフグナーの断食については、公式の記録で302日に上っており、ガンディーの145日を大きく上回っている。それは、ひとつには他者への脅迫ではなく「自己浄化」することに意図がある。しかし、同時に「社会的諸問題を解決するために真に高潔な方法」として行なわれるものであり、その背景には「要求の政治」とは異なる「昇華の政治」の考えがあるという。総じて、バフグナーが、墮落した社会においてオルターナティブを目指す「生き様」を提示して、政治家、メディア、民衆にインパクトを与えたこと、その行ないが戦術としても有効であったこと、そしてなにより人びとの「つながり」を構

築していったことが評価される。

終章では、インドの環境保護運動の将来について言及されている。著者は、村落においても消費文化が浸透してゆく中で、清貧の思想が、人びとには非現実的なものとして受け止められていると認識している。その上で、環境保護運動が展開してゆくための方策として、官僚や政治家、メディア、知識人などといったいわば「敵」陣のなかに味方を探す「つながり」を構築してゆくことの可能性を示して本書を結んでいる。

以上のように要約される本書は、次の諸点においてきわめて独創性の高い研究であるといえる。第一に、著者は、危険を顧みず研究調査地であるウッタラーカンド州に何度となく赴き、バフグナーその他の人々との交流を通じて、貴重な証言を多数獲得してきた。著者の地道な努力と不屈の精神なくして、私たち読者はこれらの証言をけっして知ることはなかったであろう。

第二に、著者がこうした困難を乗り越えてはじめて、ガンディー主義の現在の姿が鮮やかに描き出されることとなった。言い換えれば、ガンディー主義がけっしてガンディーの死後途絶えるのではなく、第一世代から第三世代へと受け継がれて今日確実に存続していることが、本研究によって明らかにされた。

第三に、著者は、本書の中心人物であるバフグナーの「自然の昇華」の哲学が、チプコー運動やテラー・ダム反対運動においていかなるかたちで機能していたかを、日本で、そしておそらく世界でもはじめて本格的に分析した。また、チプコー運動とテラー・ダム反対運動にガンディー主義が果たした役割とともに、ガンディー主義の伝統に環境的意識が明確化されてゆく経緯を具体的に示した。

第四に、著者は、「つなごりの政治」という独自の概念を用いて、バフグナーを中心に地元の人々の間で連帯感が醸成されてゆく様子や、それが世界の環境保護運動へと連なる潜在力をもつことを明確に示した。綿密で時間をかけた現地調査に基づく本書が、人々の生き様を鮮明に描き出した意義は大きく、文献にのみ基づく研究とは大きく異なる趣を醸しだしている。

とはいえ、本書を読了した評者には、次の諸点において検討すべき課題が浮上してくるのである。第一に、バフグナーらが示す「生き様」が、

「近代的・高度大衆消費社会へのオルターナティブ」だとすれば、それは、18世紀以来の資本主義や20世紀の社会主義、あるいは21世紀のグローバル社会をどのように乗り越えてゆくものなのだろうか。より具体的には、それが、近代における市場原理や利己心、計画経済、経済発展などの経済的諸価値、民主主義における多数決原理などの政治的諸価値、あるいは権利や義務などの法的諸価値などに照らして、どのような特徴をもつのだろうか。こうした諸点は、本書においてかならずしも十分に論じられているわけではないように思われる。

第二に、ガンディー主義者による環境運動が、「新しい社会運動」と親和的であるとされる点についてである。「新しい社会運動」が、脱産業社会や後期資本主義社会に特徴的な運動であるとすれば、それはすぐれて先進社会における運動であるということになる。ガンディー主義的環境運動が、「高度大衆消費社会へのオルターナティブ」だとすれば、価値志向的な「新しい社会運動」との共通性を指摘するに留まるのではなく、簡素な生き方を是認する前者の志向が、後者のそれとは根本的に異なる側面に言及する余地はないだろうか。

第三に、「つながりの政治」における「つながり」は、思想や運動において志を同じくするいわば「仲間」同士のそれであり、「仲間」の枠の向こう側には、あいかわらず「たたかいの政治」が待っているように思われる。バフグナーは、ガンディーと同様に行脚や断食といった非暴力的手法によって抵抗運動を展開していたのであり、その意味でなお「たたかいの政治」の中に身を置いていたとみることもできる。だとすれば、「つながりの政治」という概念は、「たたかいの政治」という概念に対置してよいものかどうか、あらためて問い直されてよいだろう。

第四に、インディラー・ガンディーが環境派の政治家を自認し、それがチプコー運動に幸いした点についてである。だがインディラーは、同時に1980年代以降、原子力発電所の建設を強力に推進した人物として知られている。彼女の「環境派」としての政治姿勢は、原発推進の姿勢とどのように整合するのであろうか。それが実は、「クリーンなエネルギー」としての原発を推進するためのいわばレトリカルな姿勢であった可能性はないだろうか。これに関連して、バフグナーと同じガンディー主義者第二世代に属するナーラーヤン・デーサーイーが80年代に反原発運動を展開したとき、チプコー運動で「環境派」のインディラーと一

致したバフグナーは、原発についてどのような姿勢を示したのであるか。

第五に、ガンディー主義者第一世代によるサルヴォーダヤ運動は、バーヴェ派とJP派に分裂した。このときJP派が、いわば「たたかいの政治」に傾いたのにたいして、政党政治を嫌ったバーヴェ派はそれには参加しなかった。本書では、バフグナーが、バーヴェのサルヴォーダヤ思想に共鳴したと理解されているが、他方で、政治的・経済的権力に対抗しようとする点で、(ディーブ・エコロジーの弱点をある程度克服しているというのであればなおさらのこと)JP派の姿勢をも多分に共有しているともいえるのではないか。こうしたサルヴォーダヤ運動の分裂という文脈におけるバフグナーの位置づけは、なお検討される余地が残されているように思われる。

最後に、ガンディー主義第二世代が、1970年代にガンディー思想に環境的要素を付加したとされる点についてである。第一世代のJPは、すでに1958年にシューマッハーに会っており、翌59年にシューマッハーの「仏教国の経済学」を「解脱の法を求めて」と題してインドで刊行している¹。シューマッハーは、62年にインドの経済計画担当者たちにみずからの中間技術論を説明しており、その思想は、60年代にはすでにガンディー主義者の間で需要(逆輸入)されていたとみるのが自然ではないだろうか。

とはいえ、以上に列挙した諸課題は、けっして本書の価値を減ずるものではない。それらの多くは、評者が、どちらかといえば著者の示した知見に触発されて考えたものにすぎない。いずれにしても、本研究は、それだけに潜在力を備えたものであり、評者としては、今後の石坂氏によるガンディー研究のさらなる進展を楽しみとするものである。

註

¹ Wood, Barbara, 1984, *Alias Papa: A Life of Fritz Schumacher*, London: Cutis Brown Ltd., pp. 314-316.